

9月8日(土) 研究発表第6室(3号館203)

第二言語習得における普遍文法とパラメータ

(Universal Grammar and Parameters in Second Language Acquisition)

白畑知彦 (常葉学園大学)

1. 研究目的

生成文法理論研究の発達により、母国語(L1)を獲得中の幼児にはヒトに生得的に与えられた普遍文法(Universal Grammar, 以下UG)が、経験から得られる情報だけでは導くことができない部分(文法)を獲得させる働きがあるということが分かってきた。ではL1を既に獲得してしまった第二言語(L2)学習者にもUGは同様の働きをするのであろうか。この疑問に対して、これまで概略次の3つの主張がなされてきているように思われる。(1)UGはL2学習者にL1を獲得中の幼児と全く同じように機能する。(2)UGはL2学習者にも機能するが、その際、媒介変数であるパラメータ値のL1からL2への変更を行わなければならない。(3)UGはL1学習者には機能しない。本発表では(2)の仮説を支持する。データとして日本人の第二言語としての英語習得を例に取り、『時を表す副詞節』構造内の「代名詞とその先行詞に関する構造条件」の獲得について考察する。臨界期を過ぎた第二言語(または外国語)としての英語学習者の文法獲得過程(この場合、代名詞の先行詞が何を指すかということ)にもUGが作動するということを支持しようとするものである。

次の4つの英文においてタイプCは非文となる(下付きの"i"は指示指標を表す)。

- 例1
- a. When he_i got hungry, Ken_i ate sushi. (タイプA)
 - b. Ken_i ate sushi when he_i got hungry. (タイプB)
 - c. *He_i ate sushi when Ken_i got hungry. (タイプC)
 - d. When Ken_i got hungry, he_i ate sushi. (タイプD)

これは概略UGを構成する下位理論群の一つである束縛理論によって説明されることができる。そしてこの束縛理論と名付けられた能力は、ヒトに生得的に与えられたものであるから、英語を母語として獲得中の幼児は当該文中の語彙項目と統語構造を一旦習得すれば、その統語構造を持った文に含まれる代名詞の先行詞をその構造条件に従って決定することができるというわけである。成人のL2学習者と(母語を獲得中の)幼児との文法獲得に関する根本的な相違は、前者にはL2学習時に既に獲得済みのL1からの干渉が起こり得るという点であろう。最近ではこの言語転移の問題をUGとパラメータ値の再設定という視点から見直す研究者も現われた(例えば、Hilles, 1986, White, 1985)。つまり、UGのパラメータ値が学習者のある時点での中間言語に於てまだ十分にL1からL2へ切り替えが行われていないために言語転移が原因であろうと思われる誤りが起こるとする説である。L2習得における転移と言語の普遍的特性を母語から目標言語へのUGに関するパラメータ値の変更として捉える見方はかなり興味深い仮説のように思われる。もしこの仮説が妥当性のあるものならば、例えば、『時を表す副詞節』構造内の代名詞とその先行詞に関するL2パラメータ値への変更が十分に行われていない日本人英語学習者は、上記「例1」に相当する日本語の『時を表す副詞節』構造、「ケンはお腹が空いた時、(彼は)寿司を食べた。」からの干渉を受けた不適格な英語(タイプC)を適格文と見なす。そして英文として適格ではあるが日本語の当該構造から最もかけ離れたタイプAを不適格文と見なすはずである。なぜなら日本語に於て[副詞節は主節に先行し、名詞表現もその代名詞表現に先行する]という

9月8日(土) 研究発表第6室(3号館203)

制約が働くからである。しかし、パラメータ値変更処理後は、当該文法項目を意識的に学習しないでも、正しく不適格文を不適格と捉えることができるようになる筈である。よって次のような仮説を立てて実験により検証することとする。

2. 仮説

L1習得に密接に関連しているものと思われるUGはL2習得においても機能する。しかし、その際にL2学習者は、パラメータ値のL1からL2への変更という作業を行わなければならないため、表面上その習得過程はL1を獲得中の幼児とはやや異なる段階を経る。本研究について言えば、刺激文の『時を表す副詞節』の統語構造とその語彙項目が既に習得されていても、それに含まれる代名詞とその先行詞をその構造条件に従って速やかに決定できるわけではない。しかしながら、英語の熟達度が増すにつれて、学習者はUGに属する部分を意識的に学習することなく、代名詞の先行詞を決定することができるようになる。これはUGが学習者の言語経験との相互作用によってUGパラメータ値のL1からL2への変更を活性化させているためである。

3. 実験

被験者73名は全員日本人成人であり、現在英語をなんらかの形で学習しているが、束縛理論などの知識は全くない者である。彼らは任意に2つのグループ(AグループとBグループ)に分けられた。Aグループ(中級英語学習者)は筆者の勤務する大学の2年生(及び若干名の3年生)43名であり、Bグループ(上級英語学習者)は東京都内で英米文学を専攻する大学院生(5名)、そして米国アリゾナ大学(15名)もしくはクレイトン大学(10名)に正規留学中の日本人学生合計30名である。実験内容は文法性判断力テストである。被験者への質問事項は(I)統語テストと(II)代名詞テストの2つに大きく分けられる。統語テストの質問は総計6つで、各々2つの小問を持っている。両小問が出来て1つの質問が正解と見なされる。6つの質問の内、5問以上正解ならば統語テストは合格とする。代名詞テストは全部で5問から成る。各被験者が代名詞とその先行詞の間に見られる構造条件に従って代名詞の先行詞を認識できるかどうかを調査するものである。5種類の刺激文の内容は全て因果関係成立の蓋然性の極めて高い内容の述語を含み、従属接続詞whenで結ばれており、被験者は必然的にKenもしくはTomを代名詞の先行詞として選ぶように工夫してある(例1参照)。5問中4問以上できたら代名詞テストは合格と見なす。以上が実験の概要である。制限時間は無制限であったが被験者は20-40分間で全員答えを書き終えた。もしL2習得過程が母語習得過程と全く同一であるならば、大津(1987)のL1獲得研究に於ける仮説のように、(I)統語テストが合格であった被験者は、(II)代名詞テストにも合格する筈である。しかし、もし第二言語習得時に母国語からの干渉があるのならば、(I)が合格したからといって必ずしも(II)にも合格するとは限らない。パラメータ値未変更である被験者は日本語の『時を表す副詞節』構造から一番外れたタイプAを奇異な文として選ぶ筈である。そしてそういった被験者はAグループに多いはずである。

4. 実験結果の概要

統語テストに関してはAグループ、Bグループとも全員が合格であった。代名詞テストの結果はAグループよりBグループの方が圧倒的に合格者の比率が高かった。そして代名詞テスト不合格者のほとんどがタイプAを奇異な文として選んだ。予測通りの結果が得られ本仮説を支持するのに十分な証拠となり得たと結論づけることができる。